ノラ
「はぁ、はぁ……！！
あれ、クソ……ここ行き止まりなのかよ！？
何処か、別の場所は……っ！？」

《ダッダッダ、ダッ！》
（追いつく足音）

油断していたとはいえ、貴方は熟練の冒険者である。
少女一人に追いつくなどという事は、それほど難しい事ではない。
貴方が彼女を見失わないよう追いつめると、少女は貴方の追跡に焦り、路地裏の突き当たりに出てしまった所で、必死に右に左にと逃げ道を探している最中であった。

ノラ
「げっ……嘘だろ、もう追いついたのかよ！？
な、なんだよ……オレはあんたなんかに用はねぇぞ！！」

突き当たりに追い詰められた少女は、明らかに貴方のものであった皮袋を胸に抱え、それを守るようにぎゅっと身を屈めた。
小柄な少女がするにはあまりに哀れみを誘う姿ではあったが、目だけはまるで射抜くかのように鋭く尖り貴方を睨みつけている。
手負いの獣さながらの威圧感に一瞬どうしたものかと迷う気持ちは湧いてくるが、それでも少女がした事は許せるものではない。

一歩踏み出し、貴方は【財布を返せ】と、低く少女に言い放つ。

《ザッ……》
（貴方が近付こうと、一歩踏み出す音）

ノラ
「ち、近付くんじゃねぇよ！　……なんだよ、なんだよ！！
少しくらい……少しくらい、いいだろ！？
おっさん、あんた羽振りよさそうだったし！　オレはもう、３日も何も喰ってないんだ！？
これがなきゃ明日にはどっかで行き倒れになるしかねぇ……悪いけど絶対返せねぇ！」

髪を振り乱し、薄汚れた衣服をかき乱しながら、少女は頭を振る（かぶりをふる）。
貴方はそのスラムの子供のならば珍しくもない言い訳に内心呆れながらも、これでは埒が明かないと彼女を捕まえるべく、更に一歩踏み出す。

《ザッ……》
（貴方が近付こうと、一歩踏み出す音）

ノラ
「ち、近付くなって言ってるだろう！？
こ……このぉっ！！」

《ダッ！！》
(少女の飛び掛る音)

捕まると思ったのか。
少女は、最後の手段とばかりに激昂（げっこう）しながら貴方に向かって飛び掛る。
だが、それは熟練の冒険者である貴方に対しては、あまりに無謀な試みであった。
貴方から見るとあまりに分かり易過ぎる直線的な動きに、一歩身をかわしつつ足を残すと、少女は勢いのままにその足に躓いた（つまづいた)。

ノラ
「なっ！？　あぐっ！？　……ぅ、……っ、ぁ……」

《ガッ！　バタンっ！》
(足払い、倒れる音)

《ちゃりん……》
(財布を拾う音)

少女はそのまま地面へとべしゃりと倒れこみ、懐に抱いていた貴方の財布ごと地面に転がる。
スラムの子供ならばすぐにまた起き上がり逃げ出そうとするだろうと、先んじて財布を拾った所で……貴方は何時までも少女が起き上がってこ

ない事に気付く。チェック１（先んじて（さきんじて）

ノラ

「ぅ……ん、ぅ……ぁ……ぅぅ」

まさか、あの程度で死んじまったのか……？と、流石に少し心配な思いで貴方は警戒しながらも彼女の腕を取り、そっと脈を取る。

すると、とくん……っと小さいが、確かな鼓動が反応を返してきた。

《きゅぅぅぅ……》

（※おなかの虫の鳴く音）

街中で死人を出さずに済んだかと安堵している貴方の耳にふと、きゅるるるぅ、という小さな音が聞こえてくる。

音はどうやら少女からしているようであった。

間近でよく見てみると疲労と空腹からなのであろう。少女の顔は僅かにこけ、目には薄っすらと隈が浮かんでいた。

どうやら少女の言葉はその場凌ぎの言い訳ではなかったらしい。事実であった事を察した貴方は、気を失ったままの少女を前にして、さてどうしたものかと少し悩んだ。

何処かに預けられる宛もないし、放っておいてもいいが、関わってしまった以上見捨てるのも後味悪いか……と、半ば（なかば）諦めようにため息を吐く、貴方。

そしてこの騒ぎですっかりと酔いが覚めてしまったのを感じながら、財

布を改めて仕舞い直すと、明日の朝食用の買い物をしていく事を決める。

一人分とするには少しばかり多い量にすべきか……などと考えながら、貴方は少女を担ぎ上げ、今度こそ宿の帰路へとつくのであった。

《ぎゅっ……ざっざっざっ》
（少女を担ぎ、歩き出す音）

ノラ
「ん、ぅ……ぉ……ゃ……じぅ……」